

令和7年度

学校経営計画＝（教育計画・評価表）

目指す 学校像	自分で考え、主体的に行動し、世界に羽ばたき、未来を創造していく人間の育成を理念とし、「自由・自主・自立」の校訓のもと、生徒一人ひとりの個性を尊重しつつ、明日の社会を担う人材への成長、育成に努める。また、生徒が「自分育て」をしながら、未来を創造する力「明日力」の育成を目指す。		
昨年度の成果と課題	重点項目	重点目標	達成状況
個々に応じた丁寧な学習指導や進路指導の実践、各種行事等における一人ひとりが活躍できる場の設定やグループワークによる協働的な学びを通して教育的効果をあげることができた。多様な課題を抱える生徒への適切かつ継続的な対応においては、個性を重視しつつも社会や地域との関わりを深める支援が求められる。	個々の生徒に応じた学習指導・進路指導の充実 (個別最適化・協働的な学びの視点)	生徒一人ひとりの能力や個性に応じた学習指導を行い、学力向上を図るとともに、グループワーク等を設定し、かかわりから学ぶ場の工夫をする。また、ICTを活用してキャンパスの垣根を超えた学びの場の醸成を図る。 進路指導においては、生徒各自が卒業後の進路決定が実現できるように年次に応じた支援をする。	B
	心の成長を重視した道德教育の充実 (協働的な学びの視点)	道德教育の充実をさらに図り、一人ひとりの生徒の豊かな心の育成を図る。自ら考え、自ら判断し行動できる生徒を育成する。また、協働的な学びを通して他者との関わりを深め、自分自身の価値や能力、自己評価を高める。	A
	学校並びにキャンパスにおける行事の創意工夫 (協働的な学び・見える化の視点)	魅力ある学校行事または各キャンパスにおける行事（地域や社会につながる体験学習）を企画、運営し、様々な行事を通して、より良い人間関係（教師と生徒、生徒同士）を深め、充実した高校生活が送れるよう支援する。さらなる特別活動の充実を図る。	B
	地域との連携の充実 (協働的な学び・見える化の視点)	出身中学校、前籍校との連絡を密にし、情報を共有し合い、生徒一人ひとりの成長を図る。また、保護者会や面談を通して保護者との連携を図り、協力しながら生徒を支援する。さらに、学校評価を通して挙げられた保護者・地域等からの声を参考によりよい学校運営を目指し、地域への定着を図るとともに、ボランティア活動等地域活動への参加を促す。	C
	多様な課題や問題を抱える生徒への支援 (個別最適化の視点)	各生徒が抱える悩みや課題を少しでも解消し、不安なく学校生活を送ることができるように、一人ひとりに寄り添い、担任やスクールカウンセラーだけでなく、家庭や外部関係施設等との連携を密に図り支援する。	B



自己肯定感を膨らませ、一人ひとりが「自立・自律して学ぶ力」を伸ばせるよう支援する。

評価項目	具体的目標	具体的方策	具体的行動計画（評価の基準）	評価			次年度への主な課題
				前	後	年	
国語	・生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けさせる。 ・学習を通して考える力、共感する力、想像する力、伝え合う力を養う。 ・我が国の言語文化に対する理解を深め活用する能力を身に付けさせる。	・漢字の読み書き・語句の学習等の内容を添削課題に盛り込み、社会生活に必要な国語の知識・技能の定着を図る。分からない事項について、調べる手立てを指導する。 ・漢字検定の受検を通して、効果的な漢字学習の方法を知り活用する能力を身につける。客観的な評価に基づき自らの能力を知り、努力の成果を感じる機会を設ける。	・漢字検定合格に向けて何らかの対策・支援を行い、漢字検定受検者の5割以上の合格を目指す。 ※国語科常勤教員在籍4キャンパス（日立・土浦・山形・会津）限定 ⇒A：4キャンパス/4キャンパス B：3キャンパス/4キャンパス C：2キャンパス/4キャンパス D：1キャンパス/4キャンパス E：0キャンパス/4キャンパス	C	—		・漢字検定については受験者数が減少傾向にあるが、受検者の5割以上で合格することができた。意欲のある者のみ受験している表れか。 ・国語科常勤の在籍しているキャンパスにおいては漢検学習会などを実施しているが、いないキャンパスは問題集の貸し出しにとどまっているため何らかの手立てが必要か。
		・添削課題の自分の考えを文章にまとめる活動や調べ学習、俳句の創作活動等を通して「考える力」「想像する力」「伝え合う力」を育成すると共に表現する喜びを味わわせる。 ・キャンパスにおけるHRや面接指導を通して、教員や生徒同士の関わりの中で「聴く力」、「考える力」を養うことで、長く難しい文章を読み、理解できる能力を磨かせる。	・面接指導（校外学習含む）・特別活動・道徳等実施時に①報告書などにR80を使って感想等を書かせる②他者の意見や考え・感想等を共有し自分の考えを構築する（グループワークを行う）機会を設ける、のいずれかを年間2回（前期1回・後期1回が望ましい）以上行う。 ※全キャンパス ⇒A：6キャンパス/11キャンパス B：5キャンパス/11キャンパス C：4キャンパス/11キャンパス D：3キャンパス/11キャンパス E：2キャンパス/11キャンパス	A	A	B	・報告書の記入やグループワーク等はどのキャンパスも概ね実施しており、実施回数もほぼ毎回としているキャンパスが多い。 ・この取り組みを更に深化させるべく、教員の関わり方や成果を発表させる場の設定など工夫が必要と思われる。
		・様々な教材文に触れたり、地域に根ざした学習活動に参加したりすることで我が国の言語文化や地域文化を理解し、活用する能力を身に付けさせる。 ・生徒の多様な課題に寄り添い、学び続ける意欲を培う学習支援を行う。	・1回以上国語に関連する学習活動を実施。 ※国語科常勤教員在籍4キャンパス（日立・土浦・山形・会津）限定 ⇒A：4キャンパス/4キャンパス B：3キャンパス/4キャンパス C：2キャンパス/4キャンパス D：1キャンパス/4キャンパス E：0キャンパス/4キャンパス	C	B		・国語に関連する学習活動については、常勤在籍の全キャンパスで実施することができた。内容の共有を図り、充実させていきたい。 ・常勤のいないキャンパスへの支援も検討する必要があるか。

評価項目	具体的目標	具体的方策	具体的行動計画（評価の基準）	評価			次年度への主な課題
				前	後	年	
地理歴史	・地理・歴史に関する基礎的基本的な知識及び技能の定着	・教科書の通読と添削課題・面接指導を通じて基礎的基本的な知識や技能の定着を図る	・試験平均点50～80点（観点別評価B以上）を目指す ※科目の難易度によって目標平均点を変える	A	A	A	・学力差を考慮しつつ、校外学習や面接指導の授業形式の一部導入、双方向オンライン授業等の充実とこれらを通して知識の定着を図るとともに、生徒自らが問いを立て、主体的に解決する場をより多く設定する。 ・主体的に学習に取り組む態度の育成とその評価について考察を重ねる。
	・社会的事象に関する興味・関心を高める	・個々の実態に合わせた学習指導ときめ細やかな添削指導を行う	・履修科目の90%以上の修得を目指す	A	A		
	・社会的な見方・考え方を働かせ、社会にみられる加地を主体的に解決しようとする態度の育成	・効果的な資料の提示や活用方法を知り、社会的な見方・考え方を働かせて課題を追究したり解決したりすることができるよう、場の設定や支援の方法を工夫する	・1教員年1回以上の校外学習の実施 ・双方向オンライン授業にて、グループワークなど対話的な学びの機会を1回以上実施	A	A		
公民	・理解を深めるための基本的な語句等基礎知識の獲得	・レポート作成並びに面接指導を通して基礎基本の定着を図る。左記の学習に加え、生徒の力量、進捗状況に応じて教科書の通読やICT教材、あるいは動画教材等の利活用を促す。大学進学希望者、かつ公民科科目での一般入試予定者についてはスタサプの積極的な利用を促す。	・対象の約半数が利用することを目標とする。	C	C	B	・スタディサプリ利用者数を判断材料とする評価については再度検討の余地があるかと思う。ただし、本校における進学者の傾向は一定しないことから考えれば、数字により適切に、無理なく正しくエビデンスが求められるような目標設定に改める部分が課題であると考ええる。 ・他の項目については初年度から数多の目標・方策の項目が並ぶ中で、半数以上のキャンパスで実施があった実態からすれば妥当な評価であると考ええる。
	・自分という個から所属集団や社会への視点の拡大	・多角的に物事を吟味し、現代社会の本質を見極めることのできる視点の獲得を目的として、裁判所等の施設見学や裁判の傍聴、地域の伝統行事の見学や参加といった地域ごとの特色を生かした体験的な活動への参加、あるいは模擬投票の体験等の主権者教育を通してシティズンシップ教育を充実させる。	・在学中に1回は生徒が参加する行事を実施することを目標とする。	A	A		
	・実社会の問題を自分事として捉えることができる興味・関心・意欲の醸成	・「成人」に与えられる権利と果たすべき責任について、レポート作成を通して基本的な知識を確認する。特に、独立した「家計」を担うことのできる経済の基礎知識獲得を目的とした授業等を実施する。	・進路指導と合わせて「一人暮らしと経済」のような身近なテーマで「お金」と向き合う機会を在学中に一度は設ける。	A	A		

評価項目	具体的目標	具体的方策	具体的行動計画（評価の基準）	評価			次年度への主な課題
				前	後	年	
数 学	・ 基礎基本の定着	・ 家庭学習におけるスタディサプリの活用を促し基礎・基本の定着に努める姿勢を醸成する。 ・ 面接指導における個別学習課題において、観点別評価に則した出題内容を精選し、拡充することで、生徒それぞれのペースで学習に取り組むことができる環境を整える。	⇒①前期・後期それぞれの試験において、30点未満もしくは未受験だった生徒の履修者に対する割合と、②次年度に向けた、個別学習課題の拡充（レベル別）の進捗度を、それぞれ（a、b、c）で評価したものを総合的に評価する。試験関係は「数学Ⅰ」、個別学習課題は全科目を対象とする。 評価基準 ①30点未満または未受験だった生徒の割合 a：0%以上 20%未満 b：20%以上 40%未満 c：40%以上 ②個別学習課題の拡充が完了した科目数 a：6～8 b：3～5 c：0～2 （①と②の評価を並列させたもの） A：aa B：ab ba C：ac bb ca D：bc cb E：cc	E	D		・ 直営キャンパスの数学Ⅰの追認試験対象率は約32.7%となった。この値を基準に、次年度の試験の形式を再度見直していきたい。 ・ 個別学習課題の拡充については、あまりとりかかることができず、次年度は1科目でも多く追加分を揃えたい。 ・ 主体的な設問の得点率は年間を通して50%を下回ったので、キャンパスでの指導の工夫を検討していきたい。
	・ 自身の中から解答を導く感覚の醸成 ・ 現実世界との関連性を理解 ・ 問題解決能力の向上のための協働的な学びの機会を提供	・ 添削課題における、家庭学習での主体的な調べ学習を促し、現実世界との関連性への理解を深める。 ・ 学習内容と社会との繋がりに対する興味・関心を持たせるため、日頃の学習指導において「気づき」のきっかけを作るための生徒への声掛けを適宜行う。	⇒数学科の常勤教員が所属するキャンパス（日立、柏古河、下館、会津、山形）において前期・後期それぞれの試験における「主体的設問」に対する得点率（%）で評価する。「数学Ⅰ」、「ベーシック数学」の2科目を対象とする。 評価基準 A：70%以上 B：50%以上70%未満 C：30%以上50%未満 D：10%以上30%未満 E：10%未満 ※年の評価は前期・後期の平均を取る	C	C	B	・ 試験対策授業等、各キャンパスでの独自の取り組みを導入いただいた。次年度も今年度と同様、もしくは以上の水準で実施していきたい。
		・ 生徒自身の持つ数学的な考えや意見を表現できる場を段階的に導入し、多角的な視点を持つことや個々の達成感へ繋げることのできる指導を行う。	⇒キャンパス独自での学習指導（レポート解説授業、試験対策授業、体験的活動・校外学習など。但し、面接指導での科目別授業は除く）の実施状況や、双方向オンライン授業への参加状況を調べ、前期・後期・年間で1度でも上記のいずれかを実施または参加したキャンパス数で評価する。 評価基準 A：9以上 B：7以上9未満 C：4以上7未満 D：2以上4未満 E：2未満	C	A		

評価項目	具体的目標	具体的方策	具体的行動計画（評価の基準）	評価			次年度への主な課題
				前	後	年	
理 科	- 基本的な自然現象における規則性を理解させると共に日常生活との関連付けを気付かせる。 - ICT を取り入れた学習支援等、個別最適化を図る。	観点別評価を取り入れた添削課題・個別学習課題の精選を行い、個々に応じた学びの充実を図る。	「科学と人間生活」から添削課題・個別学習課題の観点別評価を全員で見直す。 - 添削課題と連動したスタディサプリ内の対応講義動画視聴を促し、基礎固めを図る。	C	A	A	- 教科書改訂に伴うレポート作成（科学と人間生活、物理基礎、化学基礎、生物基礎、地学基礎）の際に、教科内で見直した観点別評価基準を反映させる。 - 観察・実験等は、全キャンパスでの実施率100%を目指す。理科教員不在キャンパスへの支援体制の強化、キャンパススクーリングでの協働的な学びかつ簡易的な実験の実施やICT活用の充実を図っていく。
		身近な物事・現象に関する観察、実験等を通し、探究する能力と態度を身につけさせる機会を増やす。	各キャンパスでの校外学習やICTを活用した実験の実施は、全体の3分の2以上のキャンパス実施を目指す。	D	A		
		協働的な学びを通し、基本的な概念や原理・法則を理解し科学的な見方や考え方の能力を養う。	協働的な学びは、面接指導等でグループワークを伴う活動を年1回以上、理科教員在籍キャンパス（日立・水戸・柏・いわき・ネット）での実施を目指す。	D	B		
保 健 体	- 自己管理能力、計画性の育成 - 現状の体力を知ることにより、生活習慣の改善、継続的な運動習慣を身に付ける	- オリエンテーションにより体育実技スクーリングへの意識づけ - 計画性をもった実技スクーリングへの出席を促す →キャンパス内での面接指導計画に基づき、生徒への連絡を徹底する →毎回、各キャンパスの面接指導出席率を把握することで効率よい面接指導の実施を促していく - 体力測定により、自己の身体の現状、体力を知り、基本的な生活習慣を改善するための課題を見つける →昨年度の体力測定の結果を知り、今年度の体力測定各種目の目標設定の目安となるようにする	各キャンパス出席率からの評価 評価基準 A：90%以上 B：70%以上90%未満 C：50%以上70%未満 D：30%以上50%未満 E：30%未満	B	B	B	- 全体の出席率は向上している。H.R等での周知徹底の成果が出ていると思われる。しかし、欠席者対象となると、出席率の低下がみられる。生徒、保護者への連絡など、出席しなければならないと言う意識を持つてもらうことが課題。 - 昨年度の体力測定結果を活用することができていなかった。結果を基に、自己の身体の現状や体力を知り基本的な生活習慣の改善につなげたい。

	・仲間との協働により、運動の楽しさ、喜びを味わう ・グループワークからのコミュニケーション能力育成、人間性の育成	・グループワークでの協働により、互いに協力すること、個々の違いを尊重する姿勢を育てる →面接指導時に基本的なルールや練習方法などを説明したり、提示したりすることにより活動内容が明確になり、導入時のグループワークを円滑に進めることができるようにする	・前期末・後期末にて、それぞれ全キャンパスで生徒アンケートを実施 実施の流れについて、「活動内容が明確だった」「グループワークを円滑に進められた」の2項目の回答状況から評価 ※各5段階評価：2項目の平均値を用いる 評価基準 A：4.5以上 B：4.0以上4.5未満 C：3.0以上4.0未満 D：2.0以上3.0未満 E：2.0未満	★	B	・活動内容に関するアンケートでは、80%以上の生徒が「明確だった」「円滑に進められた」と回答していた(平均値4.3) 実技開始時に面接指導の流れおよび、ルール説明の時間をきちんと確保している結果であると思う。 ・グループワークの時間を割きすぎると運動量の確保が難しくなっていくのも現状である。100分間での展開の仕方が課題となる。
	・実習等を活用し、保健分野と実生活との関連を捉えさせる	・添削課題(保健)と実生活との関連を捉えさせ、日々の生活との繋がりに対する興味・関心の芽生えに繋げる →応急手当(心肺蘇生)について、正しい手順や方法があることを理解させる。また、傷病や疾病によって身体が時間の経過によって損なわれていくため、適切な処置をする基本的な能力を身に付ける →性に関しての正しい知識を習得する ・生徒自身の考えを他者に伝えることのできる機会を設定する	下記項目の中から、各キャンパスにて2項目は必ず指導する機会を設ける 保健Ⅰ：「喫煙・飲酒について」 「応急手当・熱中症・心肺蘇生法について」 保健Ⅱ：「性に関する内容」 「食品の安全性について」 ※登校実施機会を設ける(道徳の時間利用可) ※面接指導における授業実施も可 ※保健環境・安全部からの実施と重複する項目は同時実施でも可 2項目以上実施のできたキャンパス数で評価 評価基準 A：9以上 B：7以上9未満 C：4以上7未満 D：2以上4未満 E：2未満	D	B	・保健分野の指導において、ほとんどのキャンパスが実施完了となっている。 しかし、保健Ⅰ、Ⅱの面接指導時間が1時間のため、道徳や特別活動時間を利用しての実施となることが多いため、内容によっては難しさを感じることも確認できる。 そのような場合は、外部講師を依頼することも方法であると考え。 ・がん教育の実施ができていない現状である。 病院関係者なども視野にいれ、内容自体が難しくなり過ぎないように精査し、取り組んでいきたい。

評価項目	具体的目標	具体的方策	具体的行動計画（評価の基準）	評価			次年度への主な課題
				前	後	年	
芸 術 (書道)	- 多様な場面に対応する書写の基礎能力定着 - 書道を通じた自己表現能力の向上 - 書の美しさを感じ取る鑑賞能力の育成	各学習目標に合わせたきめ細やかな添削指導を行い、生徒の書写の基礎力向上を図る。	芸術科教員研修を年1回以上実施し、教員の指導能力の向上を図る。	A	-	B	- 今年度も、芸術科教員研修を実施。研修及び芸術展の審査を行い、充実した研修となった。次年度も継続して行い、教員の指導能力の向上及び情報交換を図っていききたい。 - 鑑賞の機会を設けることが難しい状況である。鑑賞単独ではなく、実技と鑑賞を絡めての設定など、鑑賞の機会の設け方を検討していききたい。
		添削課題における創作作品や毛筆課題制作を通して、自己表現能力の向上を図るとともに書くことの楽しさや意欲を育てる。	芸術科教員在籍キャンパス(日立・水戸・土浦・古河・千葉)では、年間1回は実技の機会を設ける ⇒A：4キャンパス/5キャンパス B：3キャンパス/5キャンパス C：2キャンパス/5キャンパス D：1キャンパス/5キャンパス E：0キャンパス/5キャンパス	B	B		
		異なる書風の古典を一度に比較する内容を添削課題に盛り込み、書風の違いや書の美しさを感じ取る鑑賞力の育成を図る。	芸術科教員在籍キャンパス（日立・水戸・土浦・古河・千葉）では、年間1回は鑑賞の機会を設ける ⇒A：4キャンパス/5キャンパス B：3キャンパス/5キャンパス C：2キャンパス/5キャンパス D：1キャンパス/5キャンパス E：0キャンパス/5キャンパス	D	D		
外国語	- 基礎・基本の定着を図る - 生徒の習熟度や学習段階に応じた言語コミュニケーション能力を育成する。 - 外国語を通じて、言語や文化に対する興味関心 - 理解を深める。 - 情報や考えを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う。	生徒一人ひとりの習熟度や実態を考慮し、個々に応じた学習指導を行い、基礎・基本の定着を図る。	評価の基準：学校設定科目（英語入門、ベーシック英語）後期試験の点数が30点未満の生徒の割合で判断 →A：30%未満、B：40%未満、C：50%未満、D：60%未満、E：70%未満	※	A	B	- 校内外学習ではキャンパス間で参加人数に差があり、生徒を惹きつける魅力ある行事の工夫が必要である。一方、今年度は全キャンパスで授業を実施し、表現力向上を図る基盤を整えることができた。 - 学校設定科目で30点未満の生徒割合を大きく抑え、基礎・基本の定着は概ね達成された。次年度は、この取り組みを継続しつつ、対話的な学習や、表現力を高め合う協働的な学習の要素をより一層意図的に取り入れていく必要がある。
		校内外学習で外国語やその背景にある文化に触れる機会を設けることにより、外国語の活用に興味を持たせる。	評価の基準：ネットキャンパスを除く各キャンパスで年1回以上の校内外学習の実施を目指す →A: 10/10、B: 8～9、C: 6～7、D: 4～5、E: 3以下（分母はネットキャンパス除く10キャンパス）	D	C		
		生徒が主体的に取り組める問題を学習課題に盛り込み、学んだ内容からさらに発展した表現力を身に付ける機会を設ける。	評価の基準案：英語科常勤在籍キャンパス（日立・水戸・柏・千葉・いわき・古河・山形・ネット）において、授業形式のキャンパススクーリングや、試験対策授業等を年に2回以上の実施を目指す。（科目はキャンパス裁量） →授業を行ったキャンパスが、 A: 8/8、B: 7～6、C: 5～4、D: 3～2、E: 1	B	A		

評価項目	具体的目標	具体的方策	具体的行動計画（評価の基準）	評価			次年度への主な課題
				前	後	年	
家 庭	・生活に必要な知識・技術の習得に努める。	・成年年齢の引き下げに伴い契約や消費者問題に関する指導を強化する。 （他教科と連携しながら多角的に進める。）	・消費者教育を年1回はどのキャンパスでも実施できるよう呼びかける。教材になる内容で家庭科通信を発行し、それらを用いてHR等で指導を行う ⇒A：7キャンパス/11キャンパス B：5キャンパス/11キャンパス C：3キャンパス/11キャンパス D：1キャンパス/11キャンパス E：0キャンパス/11キャンパス	B	A		・消費者教育や体験的な活動はほとんどのキャンパスで実施することができた。その一方で、実施が0回のキャンパスも見られた。どのキャンパスでも実施しやすいような内容を考えて、教科からの呼びかけを強化していきたい。また、非常勤の先生方とも家庭科の体験的な活動について情報共有をすることで、活動の幅を広げていきたい。 ・家庭科通信についてはスケジュール通りの発行ができたが、内容を更によりよいものにしていく。
	・生活を工夫し創造する能力を育成する。	・日々の学習指導や家庭科だよりを通して、「食育」の推進に力を入れ生徒の健康増進に努める。	・家庭科通信の年4回発行を目指し、生徒・保護者に向けての食育に努める。 ⇒A：年4回/年4回 B：年3回/年4回 C：年2回/年4回 D：年1回/年4回 E：年0回/年4回	A	A	A	
	・生活の中の問題を発見し、解決に向けて動ける力、多様な見方や考え方を受け入れる力を育てる	・面接指導や校外学習の中での体験的な学習活動や、課題研究系科目の協働学習型の面接指導の中で、生徒の生活の営みにかかわる知識と技術と見方・考え方を身に付ける。	・各キャンパス1つ以上これらの活動を実施。 ⇒A：7キャンパス/11キャンパス B：5キャンパス/11キャンパス C：3キャンパス/11キャンパス D：1キャンパス/11キャンパス E：0キャンパス/11キャンパス	A	A		
情 報	・情報技術の基礎・基本の定着を図る。	・ICT学習支援ツールを用いて学習内容の理解を深める。また、情報技術の習得を目指した添削課題の作成を行う。	・面接指導にて取り組む個別学習課題にプログラミング（フローチャート）の作成を取り入れた問題を盛り込み、論理的思考の育成につなげる。 （A:実施 E:未実施）	A	A		・情報活用能力の育成に重点を置き、教科のみならず全ての生徒に身近に起きうる問題（SNSにおける炎上の危険性、フィッシング詐欺など）の対策を特別活動や道徳の機会を活用して実施していける体制を整えていく。 ・面接指導において生徒がより身近に情報問題解決につながる学習活動を計画的に盛り込み、理解し活用する能力を身につける機会を設定する。
	・問題解決に向けて情報と情報技術を活用する力を養う。	・情報モラルの理解や情報リテラシーの基礎を個別学習課題に盛り込み、普段の生活からSNS等での発信の際の注意喚起につながる活動を行い、生徒同士が協働して考える機会を持たせる。	・面接指導の個別課題に、情報モラルテストを生徒に取り組みせ、回答の確認をグループ活動で行い、生徒同士が話し合って理解を深める機会を実施する。（A:7割 B:6割 C:5割 D:5割未満）	D	C	B	
	・情報社会に主体的に参画する態度を養う。	・情報の信頼性や信ぴょう性を見極めたり確保したりする能力の育成の機会を面接指導や特別活動等に盛り込む。また、普段から生徒が適切に情報を扱い主体的にその情報を活用しようとする能力を育む活動を積極的に取り入れる。	・情報履修者のみならず、情報社会における注意点を再確認できる機会としてホームルームでの情報モラル講話や情報活用能力の育成の機会を担保していく。キャンパス実施率6割を目指す。 （A:8割 B:7割 C:6割 D:5割以下）	D	C		

評価項目	具体的目標	具体的方策	具体的行動計画（評価の基準）	評価			次年度への主な課題
				前	後	年	
学習指導 と評価お よび教育 課程 (教育運営 推進部)	・基礎・基本の習得、活用する力を育成する。 ・生徒の実態に即した ICT 学習支援ツールの確立 ・個別最適化を促す新たな教育課程の編成	・生徒の実態に見合った基礎・基本を定着させる教材を精選し、確かな学力の育成を図る。	・スタディサプリの初期導入率の直営7割以上を目指す。学習における活用事例を積極的に提案し、展開ができる範囲から生徒に促していく。	A	A	A	・スタディサプリの導入が 3 年目になるため、生徒導入率から学習支援ツール利活用率に向けての具体的行動計画を検討する。 ・教職員研修として電子黒板を活用した ICT 活用事例共有や体験学習・グループ学習実施など、協働学習の実践事案の共有などを盛り込んだ研修を実施することを検討する。 ・連絡ツール『MyiD』について、生徒保護者の既読・確認「伝える」ための運用方法に向けて共通理解を図り活用促進する。
		・生徒が能動的に学ぶことができる環境を整え、教科の枠を超えた横断的な学習活動を展開し、生徒一人ひとりの学びや成長を見とる評価を実施する。	・体験学習やグループ学習・課題研究系科目での協働学習型の実施について、生徒が主体的に学べる機会を各キャンパス1回以上実施することとし、令和7年度のキャンパス実施率80%以上を目指す。また、教科横断的な学習活動について、体験学習やスクーリングの機会を各キャンパス1回以上実施することとし、令和7年度のキャンパス実施率50%以上を目指す。	B	A		
		・体験的な活動や ICT を活用した学習活動を推し進め、主体的で深い学びの実践と物事を理解し活用しようとする能力を育む。協働的な学びを通して対話を通した深い学びの実践を行う。	・面接指導において、会場での机上学習のほかに、体験学習やキャンパススクーリングの際にグループ学習等を行うなど、生徒が選択できる機会を増やせるように、学校全体への投げかけや、キャンパス間との実施内容の情報共有を図る。 ・双方向オンライン学習を通して、7科目中5科目以上の協働的な学びの実施を目指す。	B	A		

評価項目	具体的目標	具体的方策	具体的行動計画（評価の基準）	評価			次年度への主な課題
				前	後	年	
特別活動	・ 望ましい集団活動を通して、基本的生活習慣の確立と個性の伸長を図り、自主的実践的な態度を育てる。 ・ 人間としての在り方や生き方について自覚を深め、自己を生かす能力を養う。	【ホームルーム活動】 ・ 「明日力」を育む教育活動の中で望ましい人間関係を形成し、社会的に自立しようとする自主的・実践的な態度を育成する。 ・ 「キャリア・パスポート」で高校生活の見通しを立て、振り返りを行うことで、基本的生活習慣の確立を目指す。	・ 各キャンパスで、年間1回以上グループワークの機会を設ける。 ➡前期11キャンパス中、10キャンパス。後期、9キャンパスが1回以上実施。 ・ 各キャンパスで行った活動のデータを共有し活用できるよう前期・後期で声掛け等のアナウンスを行う。昨年度以上の数のデータ保管および活用を目指す。 ➡今年度は、校内外活動、道徳共に多くのキャンパスがデータを格納されている。	B	B		・ 各キャンパスが行った活動のデータを、どれくらいの教員が閲覧し、活用しているのか、実態の把握。 ・ 修学旅行以外での、オンラインでの他キャンパスとの交流の機会を設ける。（双方向オンライン特別活動の計画・実施）
		【学校行事】 ・ 生徒一人ひとりが、心身の健康・仲間との協働が図れるように校内外の様々な教育活動（生活体験発表会、校内芸術展、定時制通信制体育大会、修学旅行、文化活動等）に積極的な参加を促す。それらの活動を通して自己に自信を持ち心身ともに豊かでたくましい生徒を育成する。 ・ 生徒が活躍できる場の設定を行う。 ・ 修学旅行では、キャンパスの垣根を超えた学びの場（事前学習や事後学習の機会）を設定し、新たな人間関係を育む場面を作る。 ・ 社会の状況を鑑みて、行事の計画・運営を行う。	・ 各キャンパスで、年間1回以上生徒が活躍できる場の設定（ウェルカムセレモニーやキャンパス行事、ボランティア活動等）の機会を設ける。 ➡前期11キャンパス中、10キャンパス。後期、7キャンパスが1回以上実施 ・ 修学旅行では、事前学習や事後学習の機会を作り、キャンパス内でのグループ活動またはオンラインでの他キャンパスとの交流の機会を設ける。 ➡大阪・関西万博グループ行動計画でグループ内の交流を図ることができた。	B	B	B	

評価項目	具体的目標	具体的方策	具体的行動計画（評価の基準）	評価			次年度への主な課題
				前	後	年	
進路指導	・生徒一人ひとりの個性を伸ばし家庭及び関係機関との連携を密にして、自らが主体的に進路選択できるようにする。	・各キャンパスの進路希望調査に基づき、年次に応じた様々な進路行事を定期的・継続的に行い勤労観や職業観の育成、希望進路実現に向けての指針を与え、進路に対する意識の高揚を図る 各キャンパスの評価を集約して評価を決める（ネットキャンパスを含まない場合） 9/10～10/10・・・A 6/10～8/10・・・B 3/10～5/10・・・C 1/10～2/10・・・D 0/10・・・E	前期に各年次対象の進路行事を1回以上実施する 後期に各年次対象の進路行事を1回以上実施する 各キャンパス（ネットキャンパスを除く）にA～Eで評価してもらう。その結果で全体の評価を決める。 前期中（後期中）に各年次で2回以上実施できた場合 ・・・A 前期中（後期中）に各年次で1回実施できた場合 ・・・B 前期中（後期中）に2つの年次で1回実施できた場合 ・・・C 前期中（後期中）に1つの年次で1回実施できた場合 ・・・D 前期中（後期中）にすべての年次で実施できなかった場合 ・・・E	C	D		・行事の実施については、キャンパスによって、各年次バランスよく実施できているところと、そうでないところの差がある。次年度に向けて、各キャンパスで進路行事の年間計画を立て、少なくとも年度中に各年次1回は、進路に関する行事を実施する。 ・保護者が来校する履修相談や面談の機会に進路について確認したり、定期的に連絡を取っていくことを継続する。キャンパス内の教員間で生徒の進路決定に向けて協力していく。就職決定に向けては、地元安定所と連携を取り、早期の進路決定につなげる。
	・生徒の実態を踏まえ、継続的な指導・組織的な援助相談体制をつくり、進路実現を目指す。	・履修相談や面談（二者・三者）等を通して、保護者と協力しながら、個々の生徒に応じた進路相談・支援をする。 ・進学・就職それぞれの指導を教員や関係機関が連携しながら一人ひとりに応じた指導を行う。 各キャンパスの評価を集約して評価を決める（ネットキャンパスを含める場合） 10/11～11/11・・・A 7/11～9/11・・・B 4/11～6/11・・・C 1/11～3/11・・・D 0/11・・・E	・保護者、教員間、ハローワークなどの関係機関等と連携しながら、進路相談や支援、指導ができているか、前期、後期それぞれキャンパスで振り返り各キャンパスにA～Eで評価してもらう。その結果で全体の評価を決める。	B	B		

評価項目	具体的目標	具体的方策	具体的行動計画（評価の基準）	評価			次年度への主な課題
				前	後	年	
生徒指導	・生徒一人ひとりが善悪や社会規範を正しく理解し、日常生活において自らの意思により判断・行動する力を養う。	・社会規範の定着のため、道徳・特別活動時においてキャンパス教員や外部講師による「非行防止」等に関する活動を実施する。その他、必要に応じて個々に応じた指導を行う。	各キャンパスにおいて年間1回以上、非行防止等に繋がる活動を実施する。 A・・・全キャンパスで実施 B・・・9～10キャンパスで実施 C・・・7～8キャンパスで実施 D・・・5～6キャンパスで実施 E・・・～4キャンパスで実施	D	C		・各種防止講話等を通して全体的な指導は概ね行うことができた。一方、実施ができていないキャンパスもあるのが現状なので、短時間であっても生徒指導だよりや関係機関からの通知等を活用して全キャンパスでの実施・問題発生の未然防止に繋げていきたい。 ・キャンパスによって実施回数の差がある状況である。担任だけでなく、キャンパス内の教員全体で生徒情報の共有を図ることで、充実した生徒指導に繋げていきたい。 ・重大事態に至る問題は発生していないが、初期段階の問題を数件認知した。教員一人ひとりが生徒の自己有用感を高めていくための工夫をし、それを実践に繋げていきたい。
	・様々な課題を抱える生徒一人ひとりに対し、充実した支援を行う。	・教員間のみに止まらず、保護者やスクールカウンセラー、医療・福祉等の関係機関と連携したうえで、生徒一人ひとりの課題解決を図る。	各キャンパスにおいて月1回以上の情報交換を実施する。 A・・・全キャンパスで実施 B・・・9～10キャンパスで実施 C・・・7～8キャンパスで実施 D・・・5～6キャンパスで実施 E・・・～4キャンパスで実施	E	E	D	
	・いじめの未然防止、早期発見、早期対応に努める。	・いじめ実態調査等の実施により、問題の把握に努め、いじめを絶対に許さない気運を醸成する。	各キャンパスにおいて年間1回以上、人権教育等のいじめ未然防止に繋がる活動を実施する。 A・・・全キャンパスで実施 B・・・9～10キャンパスで実施 C・・・7～8キャンパスで実施 D・・・5～6キャンパスで実施 E・・・～4キャンパスで実施	E	D		

評価項目	具体的目標	具体的方策	具体的行動計画（評価の基準）	評価			次年度への主な課題
				前	後	年	
保健環境 ・安全	・心身の健康と健康保持増進に必要な自立能力の育成を図る。 ・環境衛生と安全管理の徹底に努める。	・生徒の心身の健康管理を図るために、日々の健康観察および健康診断や保健調査の結果を把握し、治療勧告・保健指導・健康相談を実施（カウンセラーに繋ぐ等）し、生徒の心身の健康問題の解決のための支援を進める。	健康診断票(全キャンパス)の提出率で評価 《①直営》 a：90%以上100%未満 b：80%以上90%未満 c：80%未満 《②サポート校》 a：70%以上100%未満 b：50%以上70%未満 c：50%未満 【①と②の評価を並列させた値での評価】 A：aa B：ab ba C：ac bb ca D：bc cb E：cc	B	A		・健康診断票において、直営では90.8%、サポート校では 86.1%、全体では89.9%の提出率であった。年々、提出率（受診率）は増加傾向にある。その反面、治療勧告後の再受診率は低い。疾病の早期発見と治療が重要課題になってくる。 ・今年度は、保健・防災指導に関わる実施項目を改めて設定し、分掌から各キャンパスへの対応依頼として行なった。「保健だより」に関しては、全キャンパスでの実施完了とできたが、4項目での指導実施については終えることのできないキャンパスが5拠点となった。項目の中では、「性に関する指導」「薬物乱用防止」が未実施となったキャンパスが多くなっている。取り扱いづらい内容となるため、今後ヒアリングを実施し、外部講師の活用・活用資料の補充・各拠点での実施例なども共有していくなど、次年度への反省としたい。 また、防災面に関して、各拠点ごとに不安要素を抱える部分がある。特に、2階以上のフロアを利用するキャンパスにおいては、外部に繋がる窓・扉における転落防止措置が十分でないケースがある。利用するビルの管理上、なかなか手が付けられない背景もあるが、何かしらの対応を進めていきたい。
		・ホームルームや生徒登校時に保健だより等を利用し保健指導を実施したり、年間計画に基づく保健指導や地域と連携した防災教育を実施したりすることにより、生徒の健康の保持増進と防災意識の向上に努める。	保健指導・防災指導の実施率で評価 ①保健だより(6月・9月の計2回)を利用した対面での指導を行なっているか。 a：8キャンパス以上が実施完了 b：4キャンパス～7キャンパスが実施完了 c：実施完了が4キャンパス未満 ②「性に関する指導」「薬物乱用防止」「救急法」「防災教育」の4項目の実施を必須(実施学年・対象生徒はキャンパス裁量)として、キャンパスへ通知⇒11キャンパス中、達成できたキャンパス数で評価 a：8キャンパス以上が実施完了 b：4キャンパス～7キャンパスが実施完了 c：実施完了が4キャンパス未満 【①と②の評価を並列させた値での評価】 A：aa B：ab ba C：ac bb ca D：bc cb E：cc	C	B	B	
		・施設設備の定期点検を徹底し環境整備をすることや、危機管理マニュアルを定めることにより、各利用施設の避難経路や災害発生時の連絡体制および対応方法を明確にした上で、地域等と協力し避難訓練を実施し、生徒の災害発生時における迅速な行動についての意識徹底を図り、事故防止・事故抑止に努める。	安全点検にて、修繕対応を完了とできたキャンパスの達成率で評価 ※「修繕箇所なし」のキャンパスは「修繕完了」とみなす。 ※直営11キャンパスを対象として評価 A：9キャンパス以上が実施完了 B：7キャンパス～8キャンパスが修繕完了 C：5キャンパス～6キャンパスが修繕完了 D：3キャンパス～4キャンパスが修繕完了 E：修繕完了が3キャンパス未満	C	B		

評価項目	具体的目標	具体的方策	具体的行動計画（評価の基準）	評価			次年度への主な課題
				前	後	年	
キャンパス運営 (教務主任)	・家庭や地域との連携、協働を重視した特色ある教育活動の推進	・地域の特性を活かし、家庭や地域との連携・協働を重視し、教育活動全体を通して、多様な学びや人間性の陶冶につなげる。	・学校評価（教員）アンケートより「教員と保護者の連携が十分にとれている」の設問について「そう思う」「ややそう思う」の回答が a：80%以上、b：70%以上、c：60%以上、d：60%未満 ・学校評価（公共・民間施設）アンケートより「今後も引き続き、本校の教育活動に協力したい」の設問について「そう思う」「ややそう思う」の回答が a：80%以上、b：70%以上、c：60%以上、d：60%未満 2つの評価が aa→A、ab・bb・ac→B、ad・bc→C、bd・cc→D、cd・dd→E	-	A		※年間で評価を見るため、前期は評価できません。 ・キャンパスの教員は、家庭や地域との連携を図りながら、教育活動を展開しており、地域の方々からも本校生徒の取り組みに対して、一定の高評価をいただくことができた。 ・デジタル添削システムの導入準備など、ICTツール等を用いての業務改善に継続的に取り組んでいるが、キャンパス間・教員間での業務負担の平準化はまだ不十分だと思われる。より効率的に業務が進められるよう業務軽減の好例の共有など、改善に向けての取り組みを引き続き実施していく必要がある。
	・教科および校務分掌、事務作業など教員の働き方に偏重が出ない効率を考えた業務の推進	・働き方改革や服務規程の変更により、教職員の業務の軽減を積極的に導入し、効率的に物事を進められるような業務の改善を図る。	・常勤教職員の平均年休取得日数について A：16日以上、B：13日以上、C：10日以上、D：7日以上、E：7日未満	-	C		
	・生徒の多様性を鑑み、生徒たちの居場所となるとともに、一人ひとりの自己肯定感が高められるような雰囲気づくりや環境の整備に努める。	・教員間の情報交換や共通理解を徹底して生徒理解を深め、生徒たちの居場所となるとともに、一人ひとりの自己肯定感を高められるような雰囲気づくりや環境の整備に努める。	・学校評価（教員）アンケートより「教育活動全般」の設問番号3・9・10・17について「そう思う」「ややそう思う」の回答の平均値が A：90%以上、B：80%以上、C：70%以上、D：60%以上、E：60%未満	-	C		

【評価基準】 A：十分達成できている（100%） B：達成できている（90%以上） C：概ね達成できている（70%以上） D：不十分である（50%～70%未満） E：できていない（50%未満）